米、中の北朝鮮外交は現実的か？

漢和防務評論 20160312（抄訳）

阿部信行

（訳者コメント）

漢和防務評論誌が米中の北朝鮮外交について、平可夫氏の論評記事を掲載しましたので紹介します。
同氏は、3 つの対応モデルを提示しています。その中に、北の核保有を承認した上で、核保有国としての責任を求めるとともに、核実験、弾道ミサイル実験の停止を求め、”半島の非核化”を交渉する、とのモデルがありますが、融和的過ぎると私は思います。
日本としては、むしろ現行の対話と圧力が現在採り得る唯一の策であると思います。現在行われている米韓演習はその圧力の部分でありましょう。

別の角度から北朝鮮の核武装を考える
平可夫

例話「ある女性が妊娠した。諸々の理由で周囲の男性は皆彼女の妊娠を喜ばなかった。したがって、皆が彼女の妊娠を認めないと宣言した。3 ヶ月目、妊娠したようには見えなかった。5 ヶ月目、すでにお腹が大きくなっても多くの男性は：認めない！と宣言した。8 ヶ月目、まだ認めなかった。彼女は意固地になって、高言した：必ず生んでやる、と。とうとう最後に生まれてしまった。周囲の人々は：この子供の存在自体が存在しない、と述べた。しかし子供は確かに存在し、日に日に成長していく。」

米、中は、めくらなのか？
北朝鮮の核兵器開発、いわゆる”水素爆弾”の実験は、上述の情況と似ている。米、露、中、およそ全ての大国は”北朝鮮の核保有国としての地位”を認めない。かつてインド、パキスタンが初めて原爆実験を行った当時、大国は同じ立場を採っていたが、数年後には次々と間接、直接に承認した。
金正恩は、なぜ 2016 年 1 月に”水爆実験”をもって 2016 年の幕開けを迎え世界を驚かせたのか？総合的に見ると、内外に諸々の要因が存在する。
第一、KDR は水素爆弾とは認めない。その理由は本誌がすでに特集記事で分析したので、ここでは繰り返さない。可能性が高いのは、強化型原爆の実験である。弾頭の小型化のための実験は、技術上必須項目である。1960 乃至 70 年代の米、ソ、中は、頻繁に核実験を行った。すなわち弾頭の小型化のための実験である。弾頭のサイズを縮小する度に、信頼性を確認する実験が必要となる。コンピューターによ

る実験で完成させることはできない。
したがって今回の”水爆実験”は、明らかに弾頭の小型化のための実験であり、なお進行中である。この実験で技術的進歩があった可能性があり、この観点から見れば、今後数年間、北朝鮮は何度も核実験を繰り返す。同時に弾道ミサイル発射実験も並行して行われ、最後に弾道ミサイル+核弾頭の実戦配備が完了する。
第二、2016 年 5 月、朝鮮労働党は第 7 回党大会を開催する。これは、金正恩体制が正式に確立したことを示す。このとき多くの中央委員、政治局委員が改選されると思われる。1980 年の第 6 回党大会で金正日体制が確立した。その時の代表大会で金正日が中央委員会書記、政治局常務委員に推挙された。したがって党大会の前に、”引き出物”が必要になる。この点は中国も例外ではない。
第三、米国大統領選の前になると、北朝鮮は必ずもめ事を起こす。2012 年の米大統領選の時は、北朝鮮は”光明星 3 号”衛星を発射し、新たな制裁を受けた。
平壌は、北朝鮮核問題を米大統領選の争点にすることを求めており、さらに出来るだけ早く、米国の”核承認”を得ようとしている。これが、今後も核兵器の実験を繰り返す理由である。言い換えれば、大国が北朝鮮の”核保有の地位”を認めなければ、北朝鮮は自己の”核保有”を顕示し続けるであろう。
今回の第 4 回核実験は、短期的には中朝関係を極めて悪化させることは多言を要しない。これは、中朝の国家核心利益の闘争とも言える。妥協は不可能である。しかも政治的に見て、北朝鮮が”水爆”実験（強化型原爆の可能性が高いが）成功を宣言したことは、影響が巨大である。今後、北朝鮮は、公然と中国を批判する可能性も排除できない。

北朝鮮の核政策
今回の”水爆”実験に対する北朝鮮の官方声明は、一字一句解釈する必要がある。これは北朝鮮が初めて公開した比較的詳細な核政策の説明になっているからだ。
1. 核兵器は絶対に放棄しない。言い換えれば、半島の非核化は不可能であること。
平可夫は、モスクワ航空ショーで、核兵器問題について北朝鮮の人物と対話した。相手の姿勢は次の通り：”リビアを見よ、核兵器を自ら放棄した結果、どうなったか？イラクを見よ、生物化学兵器を自ら放棄した結果、どうなったか？狼の群れの中で武器を捨てるのは愚かだ”、と。この姿勢の中に、北朝鮮が核兵器を開発する論理を明確に見出すことができる。
KDR は、朝鮮半島の核兵器問題は、米国が責任を果たすべきと考える。リビア、イラクの後、誰が敢えて核兵器を放棄するだろうか？
北朝鮮の声明は：”米国は敵対勢力を糾合して各種各様の対北朝鮮経済制裁を行っている”と。この表現は、平壌が相当露骨に中国を”敵対勢力”に含めていることを示している。孤立した北朝鮮及び中国は、外部に多くの”敵対勢力”を造りたがっている。現在の中国は、北朝鮮と全く同じである。
如何なる条件下で核兵器を使うのか？声明の内容は良く読む価値がある。”敵対する侵略勢力が北朝鮮の主権を侵犯しなければ、北朝鮮は責任ある核保有国として、

先に核を使用することはない”と。
この表現は、”如何なる状況下でも、絶対に核を先制使用することはない”とする中国の主張とは異なる。また 1992 年の”領土が侵略された状況下では、ロシアは主権を守るため、一切の手段を使用する権利を有する”とのロシアの軍事教義(MILITARY DOCTRINE）とも若干異なる。ロシアが 1992 年の軍事教義で核を含む一切の手段を使用すると明確に述べているのは、”領土が侵略された場合”だけである。北朝鮮の声明の前提は：北朝鮮の主権を侵犯しないこと、である。この概念は、”国土侵略”よりも範囲が大きい。例えば、海上封鎖、北朝鮮船舶に対する検査等、領土外で発生した問題も”主権”の範疇かもしれない。したがって、北朝鮮の核使用は一定程度の制限（先制使用しない）があるが、中国、ロシアの条件に比べれば、ゆるい。
中国、米国にとって最も関心があるのは、核技術の移転、輸出である。平壌の官方声明は明確に：如何なる状況下でも、関連手段と技術は譲渡しない、と述べている。”如何なる状況下でも”の言葉は、人々を満足させるかもしれない。
中、米、日、露は、今後北朝鮮の核兵器に対して如何に対応するのか？引き続き無視か？
KDR は、当然北朝鮮の核兵器開発は地域の平和のためにならない、と考えているが、妊娠 7-8 ヶ月の女性は確かに妊娠しているのと同様に、北朝鮮は確かに核兵器を保有している。認めない？めくらになるのか？ずっとこのままで行くのか？今後、北朝鮮とどのように交際し、交渉するのか？すべて現実に立脚しなければならない。”半島の非核化”は一種の目標に過ぎず、追及すべき理想ではあるが、もはや現実的ではない。
したがって KDR は、北朝鮮に対する思考を転換すべき時期に来ているのではないかと考える。
一つのモデルは次の通り：北朝鮮の核兵器保有を認め、最初に核保有国としての責任を果たすよう求める。その上核実験と弾道ミサイルの実験を停止させる。ここに至った段階で、今後の”半島非核化”の条件を交渉する。当然、北朝鮮は、信頼できない国家である。金日成の時代からそうであった。今後、どのように交渉するか今後、如何なる交渉においても、北朝鮮を信用してはならない。
他のモデルは次の通り：インド、パキスタン方式を採る。黙認である。”半島非核化”問題はもはや提起せず、北朝鮮が核実験及び弾道ミサイル実験を継続しなければ、限度を維持して外交関係を改善し、経済発展を指向させ、民主化を図る。一歩一歩慎重に進める。
もう一つのモデルは、現行通り徹底した孤立化政策を維持し、内部崩壊を促す。

比較的現実的なモデルは、2 種類のみである。一、核保有の地位を認め、それに対して相応の約束をさせる。二、徹底した孤立化を図り封鎖する。金王朝の崩壊を促す。中国の北朝鮮支援はないのか？それは不可能である。
徹底した孤立化政策の危険は何か。核兵器を保有する北朝鮮はチャウセスク時代の

ルーマニアとは異なる。一旦内戦が勃発すると、核兵器問題、核拡散問題が出てくる。この問題は誰も抑制することが出来ない。
北朝鮮問題は、誰にとっても頭が痛くなる問題だ。

以上